

南部さん死去 科学教育への協力に感謝 豊中市や大阪市大の関係者

5日に死去したノーベル物理学賞受賞者の南部陽一郎さんは、豊中市を「第二のふるさと」と呼び、深い愛着を持っていた。大阪市立大の教員時代、豊中市内の自宅から通勤。アメリカに帰化し、シカゴを拠点としてからも、帰国時には豊中市の自宅で過ごしていたという。南部さんの突然の訃報に、関係者は驚きや悲しみに包まれた。

市では平成23年、市制施行75周年を記念して創設した名誉市民の第1号に南部さんを選出。メダルを南部さんに直接授与した浅利敬一郎市長は訃報を受け「科

学教育などにも非常に関心を持ってご協力をいただいたことが忘れられない。寡黙だが、非常に芯の強そうな先生だった」と振り返った。

科学振興を目的に、同市が毎年開催していた「サイエンスフェスティバル」では、24年に南部さんの名前を冠した賞を創設。会場を訪れた南部さんは学生らの説明を熱心に聞き、アドバイスを送っていたという。

同賞を受賞した府立西野田工科高でホタルの研究を行う同好会の顧問を務めていた浜崎洋七さん(60)も「学生に向けた優しい目が忘れられない。本当に残念だ」と話した。

南部さんが昭和24年から約7年間在籍した大阪市立大の関係者も別れを惜しんだ。丸信人准教授(44)は約20年前、大学院生の時に滋賀県で行われた講演に駆けつけ、南部さんの著書にサインをもらった。海外からも一目置かれた「『神』と呼ぶべき存在」で、緊張しながらお願いしたら「よく来たね」などと気さくに応じてくれたという。「研究で挫折しそうになった時、南部先生にいただいたサインが励みになってきた」と大切にしていたサインを見ながら語り、「偉大な先輩の死はショック。素粒子物理の将来についてうかがいたかった」と、故人をしのんだ。



豊中市に送られた南部陽一郎さんからの色紙や手紙など 豊中市役所